

SHOW HHEYシネマルーム

★★★

最終目的地

2008年・アメリカ映画
配給/ツイン・117分

2012 (平成24) 年8月29日鑑賞

GAGA試写室

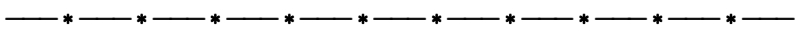
Data

監督：ジェームズ・アイヴォリー
脚本：ルース・ブラワー・ジャブヴァーラ
原作：ピーター・キャメロン『最終目的地』（新潮クレスト・ブックス刊）
出演：アンソニー・ホプキンス/ローラ・リニー/シャルロット・ゲンズブール/オマー・メトワリー/真田広之/アレクサンドラ・マリア・ララ/ノルマ・アレアンドロ

👁️👁️ みどころ

本作の舞台は南米のウルグアイ。人里離れた邸宅で暮らすのは自殺した作家に関係する4人の男女だが、その共同生活はかなり特殊だ。そこに作家の伝記を書きたいという1人の青年が登場してくる中で起きる愛を軸とした「化学反応」とは？

タイトルの意味を考えながら、ジェームズ・アイヴォリー監督の人間観察眼をじっくり味わいたい。



■原作はかなり難しそう■

本作は、名優アンソニー・ホプキンスや、『アンチクライスト』（09年）で世間をあっと驚かせる「怪演」をみせたシャルロット・ゲンズブール（『シネマルーム26』83頁参照）らが出演し、真田広之が何とアンソニー・ホプキンスのパートナー役、つまり男同士の同性愛のお相手役として登場するという「文芸作」だが、その設定はかなり特殊。

本作の原作はピーター・キャメロンという作家の『最終目的地』だが、作家ユルスがナチス・ドイツによるユダヤ人迫害から逃れてウルグアイに移り住んだという設定からしてかなり特殊だ。しかもユルス亡き後、ウルグアイの人里離れ、孤立し朽ちかけた「オチョ・リオス」の屋敷で奇妙な共同生活を営んでいるのが、①ユルスの兄アダム・グント（アンソニー・ホプキンス）②ユルスの未亡人キャロライン・グント（ローラ・リニー）③ユルスの愛人アーデン・ラングドン（シャルロット・ゲンズブール）と④幼い娘ポーシャ（アンバー・モールマン）そして⑤アダムのパートナーであるピート（真田広之）の5人というのも、かなり特殊だ。

そのうえ、真田広之が『上海の伯爵夫人』（05年）（『シネマルーム17』214頁参照）

に続いてタグを組んだジェームズ・アイヴォリー監督は、そういう背景事情をあまり丁寧に説明してくれないから、最初は少し戸惑ったが・・・。

■□■ストーリーの軸は？タイトルの意味は？■□■

本作は、自殺した作家ユルス・グントの伝記執筆に意欲を燃やすオマー・ラザギ（オマー・メトワリー）という若者が、伝記執筆の公認却下の知らせを受けたところから始まる。何事にも強気なオマーの恋人ディアドラ（アレクサンドラ・マリア・ララ）から「ウルグアイに行ったら直接交渉すれば」と勧められたオマーは、「それなら・・・」と1人ウルグアイに乗り込んだ結果、滞在するホテルがないことやアーデンの「好意」もあって、オマーも奇妙な共同生活の一員となることに・・・。

ユルスの遺言執行人はアダムとキャロラインとアーデンの3人だが、伝記執筆に賛成するのはアダムだけ。極端に反対するのはキャロラインで、中間派がアーデンだ。そんな風にはっきり色分けされている中、同居生活を始めたオマーの働きかけによっていったん下された公認却下の決定はくつがえるの？

それがストーリーの焦点だが、ジェームズ・アイヴォリー監督がそこで本当に描きたかったのはその中で少しずつ明らかにされる各人の心情の動きであり、「最終目的地」に向けた各人の決断だ。

■□■ジェームズ・アイヴォリー監督の人間観察力に注目！■□■

孤立したコミュニティにおける共同生活者たちの心情の変化における最大のポイントは、オマーとアーデンとの男女の愛だが、ジェームズ・アイヴォリー監督が描く心情の変化は多岐にわたる。オマーとアーデンの男女の愛を「一目惚れ」と言ってしまうのはあまりにも乱暴だが、キャロラインがさかんにアーデンのオマーに対する気持ちにチョッカイを出しているところを見ると、アーデンはオマーに対して最初から興味と関心が・・・？オマーという若くてハンサムそしてそれなりに将来性がありそうな(?)男性が登場してくると、従来の閉鎖的なコミュニティが大きく変わっていくのは当然だ。ジェームズ・アイヴォリー監督はオマーとアーデンとの愛の物語の進展(?)を軸として、それが年老いたアダムと将来のあるピートとの男同士の愛や夫ユルス亡き後の妻キャロラインの新たな生き方にも影響を及ぼしていく姿を丁寧に描いていく。

すると、「蜂アレルギー」(?)によって意識不明に陥ったオマーの看病のために、アメリカのコロラドから恋人のディアドラがやってくると、アーデンとディアドラの女同士の距離感とは？さらに、ある不純な取引(?)を条件としてオマーに対して伝記執筆の許可を与えていたアダムも、ディアドラがそこに介入してくるとさまざまな「化学反応」を起こすことに。本作のキャッチフレーズは「あきらめた愛、忘れてしまった愛、だけどここで最後の愛を見つける」だが、そんなテーマを監督するについては、ジェームズ・アイヴォリー監督の人間観察力に注目！

2012（平成24）年9月11日記